1.3. イデオロギーについて

さて先程から我々は、一般に政治的立場がイデオロギーである（宗教的立場もまたそうであることは言うまでもないだろう）と当然のように述べてきたが、このような意味での「イデオロギー」という表現は、恐らく K. マルクス（1818〜1883）によって用いられるようになった比較的新しい考え方であり[*1]、ロールズの挙げた古典的な（19 世紀までの）どの自由主義の思想家もこのような意味でのイデオロギーという言葉を知らなかったし、自身の哲学的・政治的立場をイデオロギーであるとは考えておらず、そのような自覚も（恐らく）なかった。彼らは皆、自身の哲学を「真理」であると考えていたはずである[*2]。これは「イデオロギー」を唱えていたマルクス自身を含めて言えることである。彼にとってイデオロギーとはブルジョア階級のイデオロギーであり、自分の立場つまり「マルクス主義（彼自身はそう呼ばなかったが）」は真理を体現する立場であったはずである。つまり彼自身には自分のイデオロギーは見えていなかったのである。このことは 20 世紀の（直ぐ後で紹介するアルチュセールを含む）マルクス主義者たちも同様であって、彼らのこうした態度は「立場のいかんにかかわらず誰も自分自身のイデオロギーを自分でそれとして見ることはできない」ということを我々に（自由主義者に）教えてくれている。我々は常にこの教えを肝に銘じておかなければならない。特に政治的正義を論じるにあたって、このことはどれほど強調してもし過ぎないほど大切な事柄であり、以下の講義の全体を通じて諸君が自分自身でこの教訓を納得してくれることを願っている。

ところでイデオロギーの重要性を認識するに際して、ロールズとほぼ同時代のフランスに生きたマルクス主義哲学者 L. アルチュセール（1918〜1990）の功績には大なるものがある、と私は考える。彼はその著書 [1, 2, 3] において ＜イデオロギーの一般理論＞ を構築することを試みた。それはマルクス主義の立場に立つ理論であり、残念ながらそれについて詳しく説明することはできないが[*3]、第 9 章ではこの考えを借りて ＜公正としての正義＞ の科学的性格について論じたいと思う。

[*1] この言葉自体は、マルクスよりも 50 年程前に仏のデステュット・ド・トラシーらによって「諸観念（ideo-）の学問（-logie）」の意味で用いられていた。

[*2] しかし彼らは同時に、自らの見出した「真理」に対して常に懐疑の念を懐いていた。それはこの後で紹介するミルの言葉や、第 6.3 節で取り上げるカントの『永遠平和のために』の付録からも窺うことができる。

[*3] アルチュセールはイデオロギーについてのマルクス主義的認識の要点を以下の三つのテーゼの形式で述べている。

（１）それぞれのイデオロギーは固有のプロブレマティック（問題系）によって内的に統一され、またその意味を変化させることなしには一つの要素も抽出できないような現実的な全体と考えられる。

（２）この全体の、つまりある特定のイデオロギー（ここでは一個人の思想）の意味は、そのイデオロギーとは異なった真理との関係にではなく、現存するイデオロギーの場、及びそれを支え、そこに反映する社会問題と社会構造との関係に依存する。特定のイデオロギーの発展の意味は、この発展と、その真理と見なされるその起源あるいは終結点との関係にではなく、この発展における、特定のイデオロギーの変化と、イデオロギーの場及びそれを支える社会問題や社会関係の変化との間に現存する関係に依存する。

（３）特定のイデオロギーの発展の原動力は、従ってイデオロギーそれ自身の内部に存在するのではなく、その外部、特定のイデオロギーのこちら側、つまり具体的な個人としてのイデオロギーの作者の中にあり、さらには個人と歴史を結ぶ複雑なつながりに応じて個人の発展の中に反映される実質的な歴史の中に存在する（強調は全てアルチュセール）[1, pp.95–6]。

ところで彼によれば、イデオロギーという言葉は通常そう思われているような（何らかの意味での政治的あるいは社会的な）「虚偽意識」を意味するものでは全くなく、むしろそれは政治や社会における単的な事実（現象）を指している。従って自然科学が自然現象に対して注意と敬意を払わなくてはならないのと同じ意味で、政治哲学はイデオロギーをそれとして尊重しなければならない。もちろんこれはイデオロギーに対して無批判であって良いと言っているのではなく、むしろ逆に（特に自分自身の）イデオロギーを無視したり頭から否定したりしてはならない、つまり「自分は（いわゆる）イデオロギーとは無縁の人間である」などと決め付けたりしてはならないという意味である。

しかし同時に、イデオロギーを哲学的議論の対象として扱うことは非常に困難でかつ厄介である[*4]。アルチュセールによれば、恐らく（否、絶対に）人間は誰しも自分のイデオロギーの中で自然にかつ無自覚に暮らしており、言ってみればイデオロギーとはそれぞれの社会において形成されている「暗黙の合意」であり「当たり前の常識」、さらに言えば「自明の真理」として存在していると推測される。彼は自身のある著作の中でこう述べている。

> [...] [決して批判されることのないこの] イデオロギーとは、ただ単にある社会、ある世紀が認知される（認識される、というのではなく）「馴染み深い」、「良く知られた」、透き通って見える神話でなければ、具体的には何であろうか? ある社会が認知される為に映し出されている鏡、認識される為にまさしく打ち砕かれねば成らぬようなあの鏡でなければ、何であろうか? 一つの社会、一つの時代のイデオロギーとは、この社会、この時代の自己意識でなければ、つまり自分自身の透明な神話の中で自分の世界の全体性を生きる自己意識の姿のうちに、自分の形式を導入し、探し出し、当然、自然発生的に見出す直接的な素材でなければ、それは何であろうか [1, p.250]。

それゆえに、人は自分のイデオロギーに気づくことが通常極めて困難である。それはまるで空気のようなもので、人間にとって必要不可欠であると同時に、（大気圧を測定すれば分る通り）それは巨大な重さを持つにもかかわらず人間は普段全くそれを気に留めることはない、そうしたものである。また、それぞれの時代に唯一つのイデオロギーが在る、と言ったものでも恐らくない。多分、各時代と地域に応じて支配的なイデオロギーが在り、それを取り巻く周辺的なイデオロギーが存在する、という事なのかも知れない（これは全く漠然とした推測に過ぎない）。例えば、ホッブズやロック、スピノザの時代のヨーロッパで支配的なイデオロギーは宗教的なそれであったのではないかと思われる。我々は遠い過去や離れた地域に対してならば、ある程度こういった（客観的）推測も可能なのであるが、自分自身の時代や地域のイデオロギーについて正確な判断をすることは極め

問題系（プロブレマティック、問いの構造）の考えはテーゼ (1) の中に現れており、それはアルチュセールの思想の核心に位置する重要な概念である。そして彼は、これらの認識を非常に高価な代価を支払って得たのだった。アルチュセールの生涯は自身のイデオロギーとの戦いの連続であったと言って良いだろう。「戦いの連続」という表現は単なる比喩ではない。実際彼はそれによって精神を病み（元々神経の繊細な人であったようだが）、1980 年に錯乱した挙句に妻を絞殺し、以後亡くなるまでの 10 年間を全くの社会的孤立のうちに過ごした（アルチュセールのこれらテーゼの認識論における意義については、鈴木 [6, 7] において A. スミスの仕事との関連で詳しく論じた）。

[*4] それゆえ、それを曲がりなりにも理論的に議論し得たアルチュセールの著作が貴重なのである。

て困難であり、もしかしたら、殆ど不可能なことなのかも知れない[*5]。前節で「政治や社会について、全てのイデオロギーの外から全体を見渡し得るような視点といったものは存在せず、高々何らかの（個々の）イデオロギー的立場からの視点しか存在しないことを認めるべきである」と述べたのはこの事だったのである。政治の領域に話を限っても、それぞれの時代に複数のイデオロギー的立場が相争うことになるのは、イデオロギーのこうした性質によるのかもしれない（本当に我々にとって、イデオロギーについて確信を持って語れる事柄は、それが存在するということ以外に殆どない）。

しかし、20 世紀の（とりわけ戦後の）自由主義的な政治哲学者たちが、自らの政治・哲学の理論的地位（status）に関して以前よりも自覚的になり、より謙虚になったのはマルクス主義（というそれ自体一つのイデオロギー）との論戦のおかげであろう、と思われる。マルクス主義者たちには、自由主義者の社会観や市場理論さえも、それらがブルジョア・イデオロギーに過ぎないという言い方で批判する傾向が強くあった。つまり自由主義の考え方や理論的枠組みそれ自体が、現に存在するブルジョワ階級による労働者階級に対する支配（搾取）を隠蔽する働きをすると言うのである。実は同時にマルキストたちは、マルクス主義哲学のみがその価値理論・歴史理論と共に（イデオロギーではなしに）科学的であるという、今になってみると大変に自己本位な主張をしていたし、こういった主張や非難の仕方がまさにイデオロギー的であったとはいえ、その中には自由主義者が真剣に受け止めるべき点が含まれており、自由主義者たちはマルクス主義との論戦を通じて、このような意味での「イデオロギー」についてより敏感になっていったのではないか、と思われるのである[*6]。政治哲学の発展・深化のためには、こういった（例えばマルクス主義などの）異なる立場からの時には苛烈な批判が不可欠であり、そういった批判はもしそれが真面目なものであれば、何時でも歓迎されるべきものなのである。そして「異なる立場からの意見に常に謙虚に耳を傾けるべきである」ことは、それ自体が自由主義（というイデオロギー）の教義に含まれており、自由主義思想の最良の代表者たちが常に心がけてきた伝統である（彼らは時にそれを「少数意見の尊重」という、諸君もよく知っている言い方で表現した）。自由主義者にとって、ある考えが意味を持つか、真剣に受け止めるべきかどうかはその発言の主体の立場や事情（例えば、その人がブルジョアかプロレタリアートか）などとは原則的に関係なく、ただその意見が理性的なものか、つまり道理に適ったものか、という事のみに係わっている。その意味で自由主義とは合理（理性）主義である。400 年以上にも渡ってその伝統が途切れずに今日に至ることができた（ロールズの哲学はその最良の成果の一つである）のも、そのような自由主義者たちの取ってきた姿勢のゆえではないかと思われるのである。前節で登場した 19 世紀を代表する偉大な自由主義者の一人である J.S. ミルは、その

---

*5 従って、自信を持ってこれについて発言することは到底できないので脚注で述べるに止めるが、私（鈴木）は個人的には、我々の時代と地域の支配的なイデオロギーとして、（すぐ後で述べるように自由主義もまたそうであるところの）「合理主義（科学主義）」と「人道主義（ヒューマニズム）」を挙げる事ができるのではないか、と推測する。しかし現代においてもアフリカや中東諸国のイデオロギーはまた異なっているのかもしれない。イデオロギーはいわゆる虚偽意識とは異なる、と述べたことを思い出して欲しい。それは必ずしも「間違った考え方（の体系）」を意味するのではなく、単に「イデオロギー」なのである。

*6 実際私は、イデオロギーの発見とそれに対する鋭い自覚は、マルクス主義の伝統が自由主義者に残してくれた最も貴重な思想的遺産であると考えている。

『自由論（On Liberty）』において次のように述べている。

> ある意見が、いかなる反論によっても論破されなかったがゆえに正しいと想定される場合と、そもそも論破を許さないためにあらかじめ正しいと想定されている場合との間には極めて大きな隔たりがある。自分の意見を反駁・反証する自由を（議論の相手に対して）完全に認めてあげることこそ、自分の意見が、自分の行動の指針として正しいと言えるための絶対的な条件なのである。全知全能でない人間は、これ以外のことからは、自分が正しいと言える合理的な保証を得ることはできない [4, p.52]。

このミルの言葉の背景にある考えは自由主義にとって根本的なものであって、それは一言で言えば、「社会（人間）にとって善い結果・価値ある成果は人々の協力によって得られる、そして協力関係はそれに係わる全ての人の善をもたらすはずだ」という考えである。そのような、互いの善を促進し合う関係を**互恵性**と呼ぶが、自由主義者はそうした互恵性はしばしば自由かつ公正な競争によって達成されると考える。実際ミルはこう言う。

> ニュートンの自然哲学でさえ、それを疑う事が許されないなら、我々はその正しさについて現在抱いている程の完全な確信は持てないだろう。我々は最も確かだと思っていることでさえも、絶対的な根拠があるわけではない。だから我々は逆に、それが間違いであることを証明せよと、常に全世界に呼びかけるしかない。呼びかけに応じる挑戦者がいないか、いても証明に失敗した場合ですら、我々は未だ確かなものからほど遠い。しかし（その場合でも）我々は現段階での人間が為し得る最善のことをなし、真理が到来する機会を最大限に設けたと言える [4, pp.55–6]。

「協力」と「競争」は一見相互に対立する考えであるように見える。しかし、人間が理性的な存在者であることによって（人間が合理的に判断・行動することによって）、両者は（常に、ではないとしても）根本的な場面では調和し得る、むしろ、人間が競争するのはそれに参加する全ての当事者に善をもたらすためなのである、という考えを自由主義思想は決して手放したことはなかった[*7]。

「自由競争」は、通常、経済活動の場面でよく耳にする言葉であるが、自由かつ公開の意見交換とは即ち互いの「より良い考え」を巡る一種の競争・競技である。そして、立場の異なる人の意見をも尊重しなければならないというのはこの「競技」の公正性を保証する条件であり、ミルは、人間はこれ以外の仕方では公共的な領域で「正しい」考えを得ることはできないという一人の自由主義者としての信念を表明しているのである。人間は様々な自由を持つが、自由主義が伝統的に「言論・思想の自由」に対してとりわけ重要な地位を与えてきたのは、一つにはこうした理由からなのである。またそのように他者の意見を尊重し謙虚に耳を傾けるという態度は、自分の属する（自

[*7] 典型的な例として、スポーツを挙げよう。スポーツの本来の姿はアマチュア・スポーツなのであって、それは歴史的には自由主義思想を最も強力に推進したイギリスにおいて発達した。人がスポーツを行なう時、当然競技の勝利を目指しているのだが、しかし（アマチュア・）スポーツの本来の目的は、勝利という結果もさることながら、むしろ公正に競技を行なう過程を競技者と観衆が楽しむことである。そして明らかにロールズは、アメリカ人としてはごく当然なことであろうが、野球のファンである。

由主義陣営という）イデオロギー・グループの内部においても厳格に維持されなければならない。ロールズは、自身の哲学史講義のために他の哲学者の著作を研究する際の態度について、次のように述べている。

> [...] 私は、いつも、自分が研究している著作家は常に私よりもはるかに賢明であると想定した。もしそうでないとしたら、彼らを研究することによって私自身と受講生の時間を無駄に費やしてしまっていることにならないだろうか。彼らの議論に何か誤りを見出した場合には、私は、彼らにもまたそのことが見えており、従ってそれをどこか別のところで論じているはずだと考えた [5, xii]。

また、上記の『政治哲学史講義』のホッブズについての章の末尾でロールズはこうも述べている。

> 最後に余談として言っておきたいのは、このように大部で多くの要素を持ったこの種のテクスト [『リヴァイアサン』のこと] を読む時には、諸君はそれを最善のそして最も興味深い仕方で解釈するよう試みなければならないということである。それを打ち負かそうと試みたり、あるいは著者がある点では間違っているとか、著者の議論は通らないことを示そうとすることには何の意味もない。重要なのは、それから諸君が読み取れる限りのものを読み取り、もし諸君がそれを最善の仕方で解釈するなら全体としての見方はどうなるであろうかを知ろうとすることなのである。そうでなければ、それを読んでもあるいは重要な哲学者の誰を読んでも、時間の無駄であると私は思う [5, p.92]。

我々もまた、歴史的な著作（もちろんロールズ自身の著作も含めて）を読解する時には、常にロールズのこうした態度を見習い、これらのことを心掛けたいものである（決して容易ではないのだけれども）。

参考文献

[1] Althusser, L., (1965a) *Pour Marx*, La Découverte/Maspero,『マルクスのために』河野健二他訳、平凡社ライブラリー 1994 年

[2] Althusser, L., J. Rancière., P. Macherey., (1965b) *Lire le Capital*, Francois Maspero,『資本論を読む』今村仁訳、ちくま学芸文庫 1996 年

[3] Althusser, L., (1995a) *Sur la Reproduction*, Presses Universitaires de France,『再生産について（上・下）』西川長夫他訳、平凡社ライブラリー 2010 年

[4] Mill, J.S., (1859) *On Liberty*, London,『自由論』斉藤悦則訳、光文社古典新訳文庫 2012 年

[5] Rawls, J., (2007) *Lectures on the History of Political Philosophy*, Harvard University Press, 『ロールズ　政治哲学史講義』斉藤純一他訳、岩波書店 2011 年

[6] Suzuki, T., (2023) "Realities and Ideologies in Social Sciences", in *Realism for Social Sciences*, Translational Systems Sciences, Urai (ed), Springer, New York and Berlin.

[7] 鈴木岳著『社会科学における現実とイデオロギー』準備草稿 2021 年